

ODIP 4.6 リリースノート

2026/5/1

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

変更内容	4
1. BigQuery サポートの追加	4
2. 同梱 Java のバージョンアップ	4
3. 例外処理 StackOverflowError の情報が出力されない問題.....	4
4. 一意性制約違反検出時のジョブログのメッセージ修正	4
5. COBOL データ型のチェック追加.....	5
6. 可変長文字列型の最大長の拡張.....	5
7. ジョブ実行管理におけるテーブル更新の動作改定.....	5
8. メッセージの表記に関する改定.....	6
(1) エラーコードの表示.....	6
(2) GUI のダイアログの改定	6
(3) GUI メニューのアクセスキー表示の改定	6
9. JVM モードの Java 起動エラーのログ出力	7
10. repedit に"-test"オプションを追加	7
11. Windows 版の.vmoptions に"-Dfile.encoding=windows-31j"オプションを追加	7
12. その他の修正.....	8
(1) ODIP アドミニストレータの改定.....	8
(2) ODIP オペレーションマネージャの改定	9
(3) ODIP リポジトリマネージャの改定	9
(4) ODIP プロセスマネージャの改定.....	10
(5) リポジトリサーバの改定.....	10
(6) ODIP トランスフォーマの改定	10
B. バージョンアップによる影響	12
1. 定義内容・検査に関する影響.....	12
2. 処理実行結果に関する影響.....	12

変更内容

1. BigQuery サポートの追加

データソース情報及びトランスフォーマリポジトリ情報の JDBC ドライバマネージャの DBMS 名一覧に「BigQuery」を追加しました。データソース情報またはトランスフォーマリポジトリ情報の登録方法、変更可能な設定値、BigQuery の制約につきまして、ODIP 4.6 のインストールDVD内にある¥Companion¥manualフォルダの「ODIP BigQuery利用ガイド」を参照してください。

2. 同梱 Java のバージョンアップ

ODIP に同梱している Java のバージョンを Java17 から Java21 に更新しました。同梱以外の Java で ODIP を実行するには、環境変数 ODIP_JVM_HOME に使用する Java のインストールフォルダを指定してください。指定できる Java のバージョンは Java21 以上です。

3. 例外処理 StackOverflowError の情報が出力されない問題

アドミニストレータから定義プロジェクトを開く、または、リポジトリマネージャからプロジェクトを登録する際に発生する StackoverflowError の例外処理において、エラーのダイアログにメッセージが表示されない問題を修正しました。また、ログファイルにメッセージを出力するように修正しました。抽出条件、導出演算定義に複雑な条件式を定義すると、定義内の参照の連鎖が長すぎて StackoverflowError が発生することがあります。ログメッセージは、このような場合の原因調査に役立ちます。

4. 一意性制約違反検出時のジョブログのメッセージ修正

次の二つのオプションの両方を有効にしてジョブを実行し、ジョブ実行中に一意性制約違反が発生したときに、ジョブログに出力される追加行数、スキップ行数が実際の行数と異なる場合があります。ODIP 内のカウンタをジョブログに出力していましたが、バッチ更新の途中でエラーが発生した場合の動作は RDBMS によって異なります。例えば、Microsoft SQL Server では一意性制約違反が発生した行だけが破棄され、他の行は反映されますが、Oracle Database では例外発生前の追加行だけが反映されます。RDBMS の動作に合わせて、追加行数、スキップ行数をジョブログに表示するように改定しました。

- ・ JDBC のバッチ更新オプション (jdbcconfig.xml の“executebatch = true”)

- 一意性制約違反検出時に 2 番目以降の重複行を破棄して継続 (odip.ini の “job.uniqueconstraint.violation = skip”)

5. COBOL データ型のチェック追加

データセットの列定義では、文字列型 (c、v) 及び数値型 (p) の場合だけ COBOL データ型を指定できますが、データ名称インポートでは、この制約がチェックされておらず、他のデータ型の列に COBOL データ型を指定してインポートすることができました。また、インポートした定義は、通常の設定の検査ではエラーが検出されずに、そのデータセットを入出力する管理単位を実行したときにエラーが検出されました。データ名称インポート及び定義の検査では次のケースでエラーを検出するように改定しました。

- フィルターのカラムに COBOL データ型の指定がない。
- 文字列型 (c,v)、数値型 (p) 以外のカラムに COBOL データ型の指定がある。
- カラムタイプが COBOL データ型と互換性がない (例: 文字列型のカラムに “9(5)” を指定)。

6. 可変長文字列型の最大長の拡張

データタイプ定義において、可変長文字列型 (v) のカラムの長さに指定できる最大長を 32,767 バイトから 65,535 バイトに拡張しました。データセットでは拡張後の最大長をもつカラムを定義することができます。ただし、データベースの制約などで、一定以上長い文字列を扱えない場合もありますので、次の点にご留意してください。

- ① データベースのテーブルでは、列値の最大長は RDBMS の制限に従います。テーブルの作成、定義の実行時に長さの制限によるエラーが発生する場合があります。
- ② CSV ファイルなどファイルを読み込む処理では、内部 DB または一時テーブルにデータをロードして処理を行います。このとき、ソート順の構成列、結合キー列に一定以上長い文字列の値があると、長さの制限またはメモリオーバーフローによるエラーが発生する場合があります。
- ③ データベースツールの “データ表示” オプションの行表示ダイアログでは、文字列が表示幅を超えると、拡張ダイアログを表示する機能を追加しています。文字列の長さが最大長に近いと、拡張ダイアログの表示に時間がかかる場合があります。

7. ジョブ実行管理におけるテーブル更新の動作改定

トランスフォーマサーバは、トランスフォーマリポジトリ内のジョブ管理テーブルに状態を記録してジョブ実行管理を行います。ジョブが異常終了した場合にはジョブ管理テーブル

にエラーメッセージを記録しますが、エラーメッセージが長すぎる場合などテーブル更新時がエラーになると、ジョブの状態が更新されないなど、いくつかのレアケースで不具合が発生していました。次の改定を行いました。

- ・ステータスとエラーメッセージとは異なるトランザクションで更新し、状態の更新漏れを防ぐように改定しました。
- ・ジョブ中の前スクリプトの実行中の状態を“未処理”から“実行中”に変更しました。ジョブの状態には、前スクリプト、エンジン、後スクリプトの状態を総合した状態を表すように変更しました。
- ・前スクリプト、後スクリプト実行中にジョブキャンセルを行ってもスクリプト終了までプロセスが継続する問題を修正しました。

8. メッセージの表記に関する改定

(1) エラーコードの表示

アドミニストレータの定義の検査、ファイル入出力、ジョブ実行などのエラーメッセージ、トランスフォーマのコマンドのエラーメッセージ、その他 ODIP 製品のログに出力するエラーメッセージの末尾にエラーコードを表示するように改定しました。

(エラーコードの表示例)

1 個のジョブが異常終了しました。(ODTSV-00030)

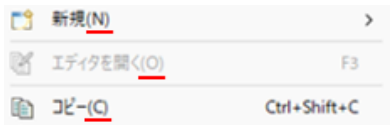
(2) GUI のダイアログの改定

GUI 上で表示される確認ダイアログでは、左端に“?”アイコンを表示しなくなりました。これは、ODIP 製品が GUI 制御に使用するフレームワークの仕様変更に伴うものです。

(3) GUI メニューのアクセスキー表示の改定

GUI のメインメニュー及びメインウィンドウのコンテキストメニューの項目には、全て 1 文字のアクセスキーを表示するようにしました。以前のバージョンでアクセスキーがなかった項目には、新たにアクセスキーを割り当てています。

(アクセスキーの表示例)



9. JVM モードの Java 起動エラーのログ出力

job.jvm.parameter で不正なオプションを指定すると、JVM モードでの処理起動時に、Java 起動エラーが発生する場合があります。このときに、Java コマンドの標準エラーを odipjob.log のメッセージに含めて出力するように改定しました。

(Java 起動エラーのジョブログへの出力メッセージの例)

```
JVM の起動に失敗しました。 [Unrecognized option: -Xxx777 Error: Could not create the Java Virtual Machine. Error: A fatal exception has occurred. Program will exit.]
```

10. repedit に” -test” オプションを追加

repedit コマンドに -test | -t オプションを追加しました。トランスフォーマリポジトリに登録されているデータソース情報が正しいかを確認するときに、このオプションを指定します。指定したデータソースが DB の場合は接続に成功するか、ファイルの場合はフォルダパスが存在するかを確認した結果、及び登録内容を出力します。

```
> repedit -rn odiprep -n TestDB -test

ODIP Transformer Version 4.6
データソース[TestDB]を確認しています...
接続情報: name[TestDB],host[localhost],port[1433],dbms[sqlserver2008],dbnm[TestDB],user[user1]
データソース[TestDB]に接続できました。
command repedit completed successfully. return code = [0]
```

11. Windows 版の.vmoptions に” -Dfile.encoding=windows-31j” オプションを追加

Linux 版トランスフォーマ除く ODIP 製品の.vmoptions に-Dfile.encoding=windows-31j を追加しました。この対応は Java18 以降、Windows 版のデフォルト文字コードが windows-31j から UTF-8 に変わったため、ODIP4.5 以前のインストーラに同梱していた Java17 以下のデフォルト文字コードにあわせて実施しました。

12. その他の修正

(1) ODIP アドミニストレータの改定

- ① メインメニュー及びツールバーの“新規”オプションの構成を変更しました。プロジェクト、フォルダ、コンポーネント、データタイプ、属性、エイリアス、カテゴリ、データセットの新規作成オプションを一つにまとめました。
- ② #Year、#Month、#Day、#Hour、#Minute、#Second 関数の引数に固定値を指定すると、関数の結果を文字列で返していて、数値との比較を行う条件式が正しく評価されない問題を修正しました。また、これらの関数実行で固定値が求まる場合、抽出条件を SQL 文の WHERE 句で実行するオプションが有効になりました。
- ③ #PeriodInDs、#PeriodInMs 関数の引数に固定値を指定すると、使用する RDBMS によって関数の結果として返される数値の精度が異なるために、数値との比較を行う条件式が正しく評価されない問題を修正しました。
- ④ [基準日]を持つユーザビューのテーブルを「データ表示」で参照すると、エラーが発生する問題を修正しました。
- ⑤ リッチテキストファイル（プロジェクト）ダイアログの「出力オプション」に、詳細オプションを展開する▶アイコンの有無と開く/閉じるの動作が逆転している問題を修正しました。
- ⑥ プリファレンスのトランスフォーマリポジトリ画面で「ユーザ名/パスワードを保存します。」のチェックを外した状態で JDBC ユーザドライバマネージャの DBMS 名を変更すると、グレーアウトされていたユーザ名/パスワードがアクティブになる問題を修正しました。また、チェックを付けると元々グレーアウトされていたユーザ名/パスワードを入力しない DBMS のユーザ名/パスワードがアクティブになる問題を修正しました。
- ⑦ データタイプのコピー&ペーストで日付/数値書式が複製されない問題を修正しました。
- ⑧ データセットのスキーマ名を変更しても、データ表示画面では常にデフォルトスキーマ（データソースのユーザ）になる問題を修正しました。
- ⑨ 導出演算ダイアログなどでの#Convert のツールチップに第三引数（日付/数値書式）の説明を追加しました。
- ⑩ 入力データのリレーション定義を新規で登録後、登録したリレーション定義のリレーションのデータセットを左右に入れ替えて更新すると、左側に入れ替えたリレーシ

ンの参照先が無効になり、定義の検査で「他のデータセットとのリレーションが定義されていません。」と警告メッセージが表示される問題を修正しました。

- ⑪ データ名称インポートダイアログの自動生成オプションのチェックボックスの表記を修正しました。“存在しないデータタイプを自動的に生成する”と“存在しない属性を自動的に生成する”の表記が逆転していました。
- ⑫ Windows11 で、ツールバーのプルダウン (▼) など、一部表示が乱れる問題を修正しました。

(2) ODIP オペレーションマネージャの改定

- ① 接続、及び、トランスフォーマリポジトリ定義画面で、本来トランスフォーマリポジトリを作成できない DBMS を選択できる問題を修正しました。
- ② ツールメニュー > プリファレンス からトランスフォーマリポジトリ接続情報の入力で JDBC データソースのプロバイダ名を変更すると、例外メッセージがログに出力される問題を修正しました。
- ③ ツールメニューのトランスフォーマ・リポジトリ・マネージャ⇒リポジトリ・コピーを選択して、トランスフォーマリポジトリをコピーするとき、“移行先リポジトリを、移行元のデータですべて置換する”オプションを指定すると、リカバリテーブルのレイアウト情報も併せてコピーするように改定しました。レイアウト情報は、トランスフォーマの実行環境ごとに、最後にリカバリデータを作成した際のレイアウト情報を保存しているもので、レイアウト変更の有無を検知するために使用します。
- ④ プリファレンスのトランスフォーマリポジトリ画面で「ユーザ名/パスワードを保存します。」のチェックを外した状態で JDBC ユーザドライバマネージャの DBMS 名を変更すると、グレーアウトされていたユーザ名/パスワードがアクティブになる問題を修正しました。また、チェックを付けると元々グレーアウトされていたユーザ名/パスワードを入力しない DBMS のユーザ名/パスワードがアクティブになる問題を修正しました。
- ⑤ Windows11 で、ツールバーのプルダウン (▼) など、一部表示が乱れる問題を修正しました。

(3) ODIP リポジトリマネージャの改定

- ① プロジェクトウィンドウのツリー上で表示できるコンテキストメニュー「履歴表示オプション」を削除しました。選択した要素の履歴は常に表示されているので、このオプションは不要でした。
- ② Windows11 で、ツールバーのプルダウン (▼) など、一部表示が乱れる問題を修正し

ました。

(4) ODIP プロセスマネージャの改定

- ① トランスフォーマリポジトリ定義画面で、本来トランスフォーマリポジトリを作成できない DBMS を選択できる問題を修正しました。
- ② Windows11 で、ツールバーのプルダウン (▼) など、一部表示が乱れる問題を修正しました。

(5) リポジトリサーバの改定

リポジトリサーバの変更はありません。

(6) ODIP トランスフォーマの改定

- ① 複数 Union かつ管理単位属性を導出する処理で `job.groupagg.union.all=false` を指定すると、グループ集計の結果が ODIP 4.1 以前と異なる場合がある問題を修正しました。
- ② 区切り文字なし (フラットファイル) かつ、ヘッダオプションあり (なし以外) を指定したファイルを出力すると、ジョブが異常終了する問題を修正しました。
- ③ `reprep` コマンドによるトランスフォーマリポジトリ登録時、`repositories.xml` に行単位で不要な改行が追加される問題を修正しました。
- ④ `repcopy` コマンドを使用してトランスフォーマリポジトリをコピーするときに、“`-replaceall`” オプションを指定すると、リカバリテーブルのレイアウト情報も併せてコピーするように改定しました。レイアウト情報は、トランスフォーマの実行環境ごとに、最後にリカバリデータを作成した際のレイアウト情報を保存しているもので、レイアウト変更の有無を検知するために使用します。
- ⑤ ジョブ開始時の出力先テーブルの初期化など、データベース上のテーブルに対して全行を削除してテーブルを空にする操作を行う場合、PostgreSQL では `DELETE` 文を実行していましたが、`TRUNCATE` 文を実行するように変更しました。
- ⑥ 日付型カラムを含むファイルを読み込むジョブを `execjob` で実行するとエラーが発生する問題を修正しました。
- ⑦ WebAPI の `/repositories/<リポジトリ名>/datasets/<データセット名>/query` の照会で、データセットに設定していない他のデータソースを検索する問題を修正しました。
- ⑧ WebAPI の一部のレスポンスヘッダで `text/plain` を返していましたが、`application/json` に統一しました。

- ⑨ WebAPI の `/repositories/<リポジトリ名>/datasets/<データセット名>/query` のパラメータに `viewMode` を追加しました。`viewMode=dataset` を指定するとコード値をカテゴリ名に変換して返します。合計行はクロス集計ユーザビューの合計行は”*”です。`dataset` 以外を指定してもエラーにはならず、コード値のまま返します。

B. バージョンアップによる影響

1. 定義内容・検査に関する影響

① データ名称インポートでデータセットの文字列 (c、v)、数値 (p) 以外のコラムに COBOL データ型を指定していた場合、定義の検査及び管理単位の実行でエラーが検出されるようになります。

② #Year、#Month、#Day、#Hour、#Minute、#Second 関数の引数に固定値を指定した抽出条件定義がある場合、定義の検査で“関数 xxx は SQL 文で実行可能ではありません”との警告が出なくなり、これらの関数以外の抽出条件は、SQL 文の WHERE 句で実行されるようになる場合があります。この場合でも処理結果は同じになります。

2. 処理実行結果に関する影響

Windows 版の.vmoptions に“-Dfile.encoding=windows-31j”を追加したことに伴い、従来のバージョンで、Java18 以降を使用して.vmoptions で-Dfile.encoding を指定していない場合、処理実行結果が異なる可能性があります。

以 上